

支援 - 何を支援する? 「みんな友だち、音楽を通して仲間作り!

発達支援を目的とした音楽活動について

宇部フロンティア大学
児童発達学科 村上玲子

1. 支援を必要とする人へかかわるにあたって

- ①何か自己発信したい! やってみたい気持ち
- ②自信を持って取り組む
- ③自分らしく、できることからやってみる
- ④自分という人間を知る、持っている能力・技術、性格、長所・短所等
(またたか、気持ちを持って...)
- ⑤対象者の理解は-----
- ⑥支援を必要としている人と支援する側の人間関係は-----

価値 他責

2. 支援者としての自分の成長、求められる資質とは?

満足感、充実感、達成感、自己実現→自分が生きていることの意味を見出す=生きがい
人と人との人間関係の構築、地域社会の連帯、人間性の回復、QOL (生活の質の向上)
支援を必要としている人を受容する能力と自分の資質を見分ける力 quality of life

3. 人間に寄り添う音楽とは

- ・黙って聴いていれば良い、病院のお世話になりたくない、手頃で気安い、人間にとって無害、
- ・好奇心をそそる。
- ・音楽を聴くことを通して、音楽や身体をありのままに知覚し、考えや思いを自由に張り巡らすことができる。
- ・日常生活の中に音楽をうまく取り込むことができる→心を癒してくれる音楽
- ・音楽を聴くのは、自分だけではない→身体を構成する神経細胞も聴いている。
- ・人間の左脳は、論理的、分析的、抽象的、代数的思考 (=言語脳)

右脳は、直感的、絵画的、音楽的、パターン認識の機能を持つ (=音楽脳)



右脳を使って左脳の疲れをとる
痴呆の予防は右脳の活性化

- ・学校では主に左脳優位 (言語脳)

左脳と右脳がバランスよく保たれることが、心身の健康に良い影響を与える。

五感 痛覚 体性感覚

・音楽と聴覚

聴覚は、キャッチできる範囲が限られている。視覚よりずっと近くのものにしか反応できない。しかし、一度に多くの音を感じ取ることができる。昼でも夜でも情報を取り込むことが可能。常時働いているので他の器官より敏感（自分の身を守るため敏感に働く＝聴覚はいのちを守る働きをする）

視覚は、何光年も離れている星のわずかな光にも反応する。しかし、遠くと近くを同時に見ることは不可能

4. 発達支援と音楽の特性

- ・生きにくい部分を生きやすくしていく活動
- ・認知能力を高める（外界への気付き）→聴覚と視覚の特徴とは？
- ・音楽は知的機能を通らず直接情動に働きかけることができる
- ・最も受け入れやすい活動で、音楽を通した自己表現が可能
- ・音楽はコミュニケーション手段として最適→言葉がなくても、心の交流ができる
- ・対象者の適応範囲が広く、いつでも、どこでも、どんな人とでもかかわれる。

5. さあ、音楽活動にチャレンジ！

①活動に入る前に、対象者を理解する。発達のレベル、特性、性格、言語、身体機能等

②音楽活動の目的は？→対象者が自分らしく自己表現できること

③音楽活動の内容 → 発達に沿った活動、誰もが参加できる程度の技術を使った活動

④どのような音や音楽を使用するのか、歌唱、楽器、身体運動等

- ・楽器の順序 振る→叩く→吹く
- ・心地よい音色
- ・扱い難いもの、極端に高音・低音は避ける

⑤活動の振り返り

- ・対象者とコミュニケーションがとれた？
- ・対象者と自分にとって楽しい活動だった？
- ・対象者が主役、自己表現ができた？

⑥危機管理の対処-----パニックが起きた時→音楽活動を中止→安定した雰囲気を作る

6. 発達支援を目的とした音楽活動の中で使われる音楽、音楽とは？

- 発達支援を目的とした音楽活動の中で使われる音楽とは、人間の音楽活動全てを含むものであり、後に音楽活動に発展するような幼児のリズミカルな運動、発声、音を楽しむ反復行動等原始的な行動形態から、歌う、跳ぶ、跳ねる、楽器を弾いて楽しむ音楽活動、更に高度な芸術音楽の創造、演奏、鑑賞、舞踊等まで全て含まれる。

音楽を聴く活動、生活（環境）の内に音楽を取り入れる活動、音を出す活動（音楽を演奏する活動）

●音楽活動を分類すると6分類に分けられる

- ①聴く ②音を出す ③歌う ④身体活動 ⑤創造活動 ⑥作曲活動

- ♪歌唱（声を出す）-----あらゆる対象者に対して有効に働きかけることができる
歌遊び、手遊び、絵かき歌
- ♪楽器（モノに触れて音を出す）-----楽器を何の目的で使うのか、身体機能の維持・改善、
情動の発散
楽器遊び、音遊び
- ♪身体運動（身体を動かす）-----身体機能の維持・改善、情動の発散、ボディーイメージ
ひも遊び、布遊び、ダンス、椅子取り遊び、ボディパーカッション

●心理療法の立場から、人間が集団的に音を出し合って、聴覚的に協和感を味わい、相互の協力を楽しむことは、人間の根本的欲求で集団本能

●人間は、社会の中で、集団の中で「役割」を果たし、その役割担当活動が社会的集団的に受け入れられ、役割としての自分の存在が他者から頼られているという集団所属感によって生きがいを見出す
みんなで歌うことやコーラス、合奏、オーケストラ等の音楽活動は、人と人との間の一体感、調和感を即実感でき、高度の交流効果が期待できる

↓
心と心のコミュニケーションの道すじが開通する

・欲求不満の多い児童への指導の例

→ドラムやシンバルを思いっきり叩かせて、攻撃的な緊張を発散させる

ピアノや他の伴奏楽器で音楽的に支え、カタルシスを美的に昇華させる

●音楽とその他の活動

音楽以外の活動と音楽を組み合わせた表現の総合化＝トータルな表現へ

音楽は聴覚を通して心の世界を表現し享受するが、視覚や身体運動を通して心の内面を表現、音楽は他の表現を誘発したり、他の表現媒体とともに人間の豊かな表現を可能にする。

⇒総合的表現活動へ

- ・音楽運動療法—音楽のダイナミックに即した身体的身振りやアクションを伴った表現活動
- ・音楽劇療法—心理劇（サイコドラマ）、役割を持って演じる中で音楽が心の中の表現を誘発させる
表現活動
- ・遊戯療法的音楽療法—音楽を伴ったレクリエーション、ゲーム遊びを取り入れた表現活動
- ・音楽描画療法—音楽を伴った主体的、力動的な描画運動、造形表現

7. 発達支援を目的にした音楽活動での注意事項

- ・発達障害児の場合、～がひける、～叩ける、～踊れるという評価は難しい
- ・認知、身体運動、情緒、対人関係と部分的に見るのではなく、発達をトータルに捉えていくことが大切、どのように関係し合っているか、子どもの全体像や発達の構造を捉える
- ・不得意な部分をたかめる、得意な部分を不得意な部分へ働きかける
- ・外界認知は視覚優位、対人優位、対物優位
- ・発達障害児の場合、初期発達のバランスに問題があることが多い

8. 発達支援のあり方とは

●発達支援の捉え方

- ・育ちにくさの原因を分析し、それら一つ一つ解決し、彼らの育ちを彼らなりに成し遂げられるように援助する営み
- ・子どもの育ちは、大人の教育によって一方的に教えられて進んでいくものではない
- ・子どもが育っていくためには、日常生活での経験や教えられたことを積極的に自分の中に取り込んでいく、子どもの能動性が不可欠
- ・能動性の基盤は自信を持つこと
- ・課題をやり遂げた満足感、周囲から認められること、ほめられることが自信の根源
- ・達成感を味わうことのない努力の繰り返しでは、子どもたちの自信や育とうとする意欲は育たない
- ・支援の目的は、生きていくために必要な力を育てること
- ・子どもの将来の生活への見通しを持つこと、地域生活を送るための現実的な能力を育てることにつながるなければならない
- ・周囲の人たちと楽しく関わりながら自分の人生を豊かに創っていける人間を育てることが目的
- ・発達支援では、特殊な技術が重視されるのではなく、注意深い支援と入念な場面設定が必要である。
(北九州市立総合療育センター初代所長高松鶴吉)
- ・地域で楽しく充実した生活を送ることができること、いかに普通の生活に近づけられるかが重要な課題
- ・子どもの全体像や生活する子どもの姿を見据え、将来どのような人間に育てて欲しいのか
- ・児童・学童期・成人期を見通した支援が必要
- ・乳幼児期に関わる職員が、成人期に起きる「自立を阻止する様々な問題を理解しておかなければならない
- ・支援家は、「子どもをどのような人間に育てたいのか、人間にとって何が幸せなのか、子どもたちが幸せになれる社会とは」、いつも考えておかなければならない。自らも幸せを求められる人間でなければならない。社会や人間のあり方を絶えず模索していく人間であること

●求められる発達支援とは

- ・対象者とその家族を援助しようとする努力のすべて
 - ・対象者が地域で育ち、家族と暮らす時に生じる様々な問題を解決していく努力すべてである。
 - ・成人期に「豊かに充実した自分自身のための人生」を送れる人を育てること
- 対象者 t f g が、イエス・ノーがはっきり伝えられる能力、何をしたいか他者に伝えられる能力、周囲の人たちとうまく折り合える能力を育てること